コラム

ダンテ(1265〜1321)の天国と親鸞(1173〜1262)の極楽浄土が示唆する研究施設と生産現場との人材構成の違い

(A)ダンテの天国
(第1天から第10天までの階層から構成)
(1)ピラミッド型階層組織
(2)西洋人のアラヤ識
西洋の大陸的風土に適応し続け，遺伝を繰り返しながら蓄積した多種多様のあらゆる経験の蔵
(潜在意識)
(3)多民族社会
(4)競争型論理的思考
(5)独創性評価
(6)基本特許型
(7)革新技術先進国
(8)能力主義雇用
(9)すぐれたエリート選考法
(10)ノーベル賞型
(A′)西洋型研究施設の人材構成

(B)親鸞の極楽浄土
(善人なをもて往生をとぐ，いはんや悪人をや)
(1)台形型均質単層組織
(2)日本人のアラヤ識
日本の島国的風土に適応し続け，遺伝を繰り返しながら蓄積した一種一様のすべての経験の蔵
(潜在意識)
(3)単一民族社会
(4)協調型情緒的思考
(5)生産性評価
(6)改良特許型
(7)成熟技術王国
(8)年功序列雇用
強い構成員平均化志向
(9)構成員の総意を評価
(10)功労賞型
(B′)日本型生産現場の人材構成

(佐野　幸吉)

編集後記

今世紀も余すところあと10年，いわゆる世紀末の到来です.「世紀末」という言葉からあまり良いイメージは浮かんできませんが，願わくはこの世紀末は清新で活気に満ちた時代であってもらいたい，また，日本の鉄鋼業においてもいっそうの飛躍，発展を遂げる10年であってほしいものです.

本稿を書いています時点(1989年12月)では，連日のごとく東欧圏の政治・社会的動静がマスコミを賑わしています．ポーランド，東ドイツ，チェコをはじめいずれの国においても，一党独裁と官僚支配の積年の病幣とそれに対する人々の憤まんが一挙に表面化した感がありますが，当事者すら日々の状況を把握することが困難なほど情勢の変化は目まぐるしく，筆者などただ瞠目して眺めるのみです.

この東欧圏の動静についての報道のうち，筆者の興味を引いたエピソードがあります．それは，東独より西独へ逃れた労働者のうち，一部の人達が再び東独へ帰ったという話です．彼らは，望んだはずの自由に戸惑い，自ら思考して自分の行動を決定しなければならない社会に困惑し，そうすることが必要でない東独社会を再び選んだということのようです．自分で意志決定をしなくてよいことを安逸と感じる精神構造は，必ずしも我々日本人の社会と無縁とは言いきれない気も致します.

さて，本年11月号で「転炉機能の拡大」特集号を企画しております．本特集号では，「転炉技術の発展と今後の展望」や「複合吹錬の導入経緯」など関係各位にお願いした解説や技術資料等の掲載を予定しております.

転炉製鋼法のみに焦点を当てた特集号は，過去10年ばかりありませんでした．この間の技術の進歩は，複合吹錬の確立や溶銑予備処理の開発に伴う製鋼法の変革をはじめ目覚ましいものであったことは，読者諸兄の御承知のとおりです．この時期に特集号という形で近年の転炉製鋼技術に関する研究・開発の成果を集録しておくことは極めて有意義であると考えます．この点を御理解いただき，投稿の〆切りも近くなりましたので，奮って御投稿のほどお願い致します.

(M. H.)